

「地元住民が参加した植物調査と植物標本作成」

○白井隆、白井温紀、矢崎友嗣 ((一社)湿原研究所)

十勝海岸湖沼群(北海道湖水地方)の総合調査のため、2013年4月、湿原研究所は地元住民が参加した湿原や河畔林などの植物調査を目的とした、「タイキ・フローラ」を発足させた。札幌市立大学の矢部和夫教授を顧問に、自然の中で植物観察を楽しみながら、植物調査のセミプロを目指す意気込みで学習している。

一般の趣味人の多くは、散策で見つけた花の名前を図鑑で調べたり、切り花や押し花用に手折ったりするが、タイキ・フローラでは、花の鑑賞にとどまらず、植物の成り立ちや生育環境を知ること、植物や自然界の面白さ、大切さを知るといった楽しみ方を提案している。また、足元の花を眺めるのに終始するのではなく、その植物の成育環境に目を向けることで、より広範囲の自然の成り立ちを観察する目を養い、人間活動と自然の関係も理解できるよう働きかけている。

当初の参加人数は、植物の踏み付けや貴重種の盗掘被害を避けるため、10人とした。リーダーは、30年ほど趣味で野の花を見て歩いている50代の地元住民とし、散策区域の案内を依頼した。その他のメンバーも、それぞれ視点は異なるが自然愛好家である。

発足と同時に、初年度の日程もおおよそ決め、4月下旬から雪が積もる直前の12月初旬まで、月に1回~3回行う予定とした。自然を楽しむと同時に、1年を通して豊かな自然の在り方を一緒に考える活動となるだろうことが大いに期待された。

折しも、株式会社富士通が開始したサービス「富士通フォトシステム」の試験的運用機関として湿原研究所が当選したため、それを植物調査に役立てることもなった。このシステムでは、写真のデータに含まれる撮影場所の位置情報と日時を蓄積することで情報を一元的に管理することができ、開花期や分布状況だけでなく、年ごとの違いなどの情報を視覚的に得ることができる。当研究所では、このシステムを用い、北海道全域で3年に一度実施しているフラワーソンを、北海道湖水地方、あるいは、南十勝等の「地域版」にすることを目的に掲げている。

また、植物調査の基礎となる植物標本の作成も行っている。博物館学芸員による「植物標本作成」講座を受講し、調査地で植物採取と標本作成を開始。並行して、環境の見方や植物の観察・記録方法についても基礎から学び、植物調査に生かしている。

このように、タイキ・フローラの活動を通じて、地域の自然に関心を持ち調査を行う人の裾野が広がり、調査の加速することが期待される。